



児童図書研究室だより

平成 25 年 12 月 12 日 発行

Vol.14

新美南吉 生誕100年

「ごんぎつね」や「てぶくろをかいに」で知られる新美南吉が生まれて今年で100年目にあたります。県立図書館でも、児童図書研究室において、企画展示を行いました。新美南吉について簡単に紹介します。

南吉の生涯

〈生立ち～少年期〉

新美南吉は、1913年(大正2)年7月30日に愛知県知多郡半田町(岩滑・やなべ)で、畳屋を営む父・渡邊多蔵と、母・りゑの次男として誕生しました。しかし、南吉は、わずか8歳で養子に出され、両親からの愛情を受けることなく寂しい生活を送りました。

〈青年時代〉

中学卒業後に受けた岡崎師範学校の受験は、体が細いために体格検査で落ちてしまいます。その後、小学校の代員教諭を勤めながら鈴木三重吉が主催する『赤い鳥』に投稿し始めます。代員教諭をやめた後は、童話同人誌『チチノキ』に加入しました。そこで、後の恩人となる異聖歌や与田準一、そして北原白秋と出会い、文学の力を伸ばしていきました。そして弱冠18歳にしてあの有名な「ごん狐」が赤い鳥1月号に掲載されました。東京外国語大学英語部日本文学に入学した南吉は、青春を謳歌するものの、結核の症状がはじまります。しかし、小説や幼年童話などを50篇も書き上げていきました。

〈帰郷と終焉〉

故郷での療養生活を始め、落ち着いた環境の中で、体調も回復していきました。そんな中、出版社からの依頼で南吉は、「良寛物語 手毬と鉢の子」の執筆にとりかかりましたが、これが体への負担となり、腎臓病の上に再び結核の症状が出てきました。体調は思わしくないのに、「ごんごろ鐘」、「おぢいさんのランプ」など南吉の名を不朽のものにする作品を次々に書いていきました。南吉は、昼間は離れて吸入をしたり読書をしたりして過ごし、夕方から夜にかけては、継母・志んどのやっている下駄屋の火鉢の傍らで原稿を書いていました。その後「耳」「小さい太郎の悲しみ」「疔(いぼ)」などが生まれるものの、この命を削るような執筆活動でとうとう、南吉は1943年の3月22日に29歳の若さで亡くなりました。

南吉の文学

南吉は、すぐれた文学の要件として、「簡潔・明快・生新しさ・内容のおもしろさ」を求めました。このよう物語観は、当時の写實的リアリズムに陥っていた文学への批判でもありました。さて、南吉の作品の魅力とは何でしょうか。

①郷土性

南吉は、日記に「ぼくはどんなに有名になり、どんなに金がまいるようになって、華族や都会のインテリや有閑マダムの出でくる小説を書こうとは思ってはいらない。・・・」と記しています。どこにでも見られる農村を舞台にして、身近な事件が語られることで、読者は親しみや、懐かしさを感じます。



②豊かな物語性

〈主題〉：生存所屬が異なるもの同士、例えば、人間と動物(ごんぎつね)、魔界と人間界(巨男の話)の心の触れ合いや通い合いをテーマにしていることが多く、これは、南吉の幼少時代の複雑な家庭環境による体験や、人より弱く生まれたことが大きく影響しているようです。

〈主人公〉：南吉の描く主人公は、ストーリーの進行とともに心の変質をとげていきます。南吉にとっての登場人物は、「人間とは何か」を問う格好の材料であり、かれらの行動や心理を追うことで、人間の中に潜む孤独やエゴを発見しています。

〈主人公の周辺にいる人物〉：主人公の周りに奇妙な人物たちを配置することで、それぞれの登場人物にインパクトを与えています。たとえば、左右目の大きさの違う嘘つき、死んだふりのうまいほらふきなど、主人公とのかかわりでは重要な役割を果たしています。

③少年心理の描写

南吉は、子どもの内なる視点から見た世界の描写が、的確で鋭く、読者はかつての生活経験が呼び起こされて、思わず「なるほど」と共感を覚えます。かわりやすさ、うつろいやすさを敏感にキャッチする子どものナイーブな心性をうまくあらわします。

ごんぎつね

1931年(昭和6)年、「スバルタノート」と称される南吉のノートに、「権狐」の草稿が書かれており、1932年(昭和7年)の復刊『赤い鳥』の1月号に「ごん狐」として掲載されました。「赤い鳥」掲載のものは、主宰者の鈴木三重吉の添削が行われたというのが伝説になっています。三重吉が致稿することで文章は簡潔になり、芸術的価値は向上したと一般的に評価されています。しかし、他方では、筆者の意図や作品の舞台になった「岩滑(やなべ)」の地域に関し、無視・無知で改稿が行われたという意見もあります。

また、「ごんぎつね」が初めて小学校の教科書に掲載されたのは、昭和31年(1956)の大日本図書版です。その後、各社も追随し、光村図書版日本で発行される全教科書に掲載されることになりました。それ以来、全国の小学校4年生に親しまれています。分かりやすいストーリーであることや、ごんが兵十へ罪滅ぼしをすることで心の通い合いを求める姿に惹きつけられることが、長く教科書に掲載され続けている理由のひとつかもしれません。

〈主要参考文献〉

- ・『新美南吉の世界』 浜野卓也／著 新評社 1973
 - ・『新美南吉と児童文学』 根本正義／著 高文堂出版者 1987
- ほか

「子どもの心の発達と絵本」を開催しました

平成25年10月17日(木)岡山県立図書館2階デジタル情報シアターにて、ボランティアスキルアップ講座「子どもの心の発達と絵本」を開催しました。今回は、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授の林創氏をお迎えし、絵本や絵本を読み聞かせをすることが、子どもの心の発達にどう関係しているのかについて御講義いただきました。その際、2つのキーワードを中心に話をされました。それは、「共同注意」と「心の理論」です。「共同注意」とは、親が赤ちゃんの視線を合わせた後に、他の対象を見て注意を促すと、赤ちゃんもその対象の方を見るという行為のことで、この能力が「教える」と「学ぶ」ことを可能にしているということでした。この能力と、9ヶ月ごろから発達する、本人、他者(主に保護者)、物の3つを結びつけながらコミュニケーションする能力と、1歳前後から発達する、絵という「2次元のもの」が「何か実物を表したもの」であるということを理解できる能力が絡み合うから、絵本の内容が分かるのだと言われました。つまり、絵本の絵を見たときに「りんごだね」と声をかけられた子どもが、その絵がりんごであることが理解でき、実物のりんごと言葉が結びつくのだということでした。

また、目に見えない心の存在に気づき、「他者とかかわる心」をどのように身につけていくかについては「心の理論」に触れながら説明されました。「心の理論」とは、「～さんは、今こんな気持ちだからこんな行動をとるんだろうな」と相手の心を想像して行動と結び付けることです。この能力は4、5歳から発達するので、例えば、きつねと村人たちのだまし合いをユーモラスに描いた絵本『きつねのホイティ』は、小学生になってからの方がより楽しめるということでした。

絵本の読み聞かせをすることが、ふれあいを高めるだけでなく、言葉の獲得や象徴機能の発達など、子どものさまざまな発達に関わっていることが理解できる講義でした。参加者からは、「普段何気なく行っていることの理論的な裏付けを考える機会になった。」という感想がありました。

「マザーグースの世界へ —英米児童詩を楽しむために」を開催しました

平成25年10月20日(日)岡山県立図書館とことん活用講座「マザーグースの世界へ—英米児童詩を楽しむために」を開催しました。くらしき作陽大学の吉岡由佳氏を講師に迎え、マザーグースを中心とした英米詩の魅力やその文化的背景についてお話いただきました。吉岡氏はまず、ビートルズの『Lady Madonna』をかけながら、その歌詞のなかにでてくる“貧乏で、子だくさんのお母さん”とは、マザーグースの『靴に住むおばあさん』のことであり、イギリスにおいてマザーグースは、何百年もの年月を経ても脈々と受け継がれていることを話されました。そのあと、マザーグースを読み解く鍵として、音とリズム、挿絵、ナンセンスを挙げられました。『Hey diddle diddle』の挿絵が画家の読み取り方によって違いが出ていることを、多くの図版で示してくださいました。そして最後に、英語圏の文化への理解を深めるためには、マザーグースとシェイクスピアと聖書が欠かせないと話され、マザーグースに今なおひきつけられるのは、人間そのものを表現したものだからではないかと結ばれました。講演後も、質問をする人が多く集まり、マザーグースにとどまらず英語圏の文化についての話が尽きない様子でした。



◆◆◆ イベント情報 ◆◆◆

ヨムヨムクリスマスおはなし会

冬のおはなし会を開催します。クリスマスや冬に関する絵本の読み聞かせと、ツリーやリースの工作を計画しています。親子でぜひご参加ください。

◆平成25年12月21日(土)

14:00~15:30(受付開始13:30)

◆岡山県立図書館2階 多目的ホール

◆先着順40名(保護者同伴可)

◆事前申込み不要

◆入場無料

岡山県立図書館開館10周年記念

「NHKおかやま朗読ひろば」公開録音

◆平成26年1月11日(土)

第一部:こどもの部 10:30~11:20

第二部:大人の部 13:00~15:00

◆岡山県立図書館2階 多目的ホール

◆郵便往復はがきでお申込みください。

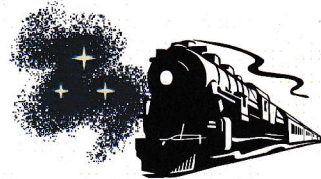
詳しくはNHK岡山放送局または岡山県立図書館企画・メディア班までお問い合わせください

◆申込み締切 12月25日(水) ◆入場無料

没後80年 宮沢賢治

小学校の教科書に必ず登場する宮沢賢治は今年の9月で、没後80年を迎えました。現在、高く評価されている宮沢賢治ですが、生前の宮沢賢治はあまり高い評価を得ませんでした。生前に自費で出版した詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』の売れ行きは思わしくなかったようです。しかし、生前から一貫して宮沢賢治を高く評価していた草野心平、また、高村光太郎、横光利一の推挙により世の中に知られるになりました。

児童図書研究室において、9月18日から11月17日までの間、展示を行いました。



【賢治の生涯】

宮沢賢治は明治29年、岩手県の花巻で、5人兄弟の長男として生まれました。賢治の生家は古着商と質商を営んでおり、花巻で農業を営む一般家庭に比べ裕福だったといわれます。父・政次郎が熱心な浄土真宗の信徒であったため、幼い頃から仏教に親しんでいました。経典を暗誦していたという逸話も残されています。この頃には後の文学に影響するような家庭環境がすでに形成されていたことがわかります。

明治42年花巻尋常高等小学校尋常科を卒業後、盛岡中学に入学します。この頃には岩手山にたびたび登り、この時の自然体験が後の文学に反映されたと考えられています。また、短歌を詠み始めましたのもこの時期からです。

盛岡中学卒業後、一年の浪人生活を経て、盛岡高等農林学校農学科に進学しました。在学中には、鉱物、地質、土壌など、農学の理化学的な研究をしたようで、その影響が作品にも見られます。

それまで短歌を作っていた賢治ですが、大正5年から散文を作り始めました。その処女作が「丹藤川」（後に改筆され「家長制度」）です。同年には学校の校友会報に彼のはじめての詩や短歌が発表されました。これ以降、彼の作品が校友会報や同人誌『アザリア』などに度々発表されるようになりました。

童話の創作は、農学校卒業後から始まったと見られています。家族の証言から「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」などが初めての童話とされ、ここから意欲的な創作活動に入りました。

年がたつにつれ、賢治の日蓮宗に対する信仰がますます深まっています。『本化妙宗式目講義録』に感化された賢治は、国柱会に入会し、浄土真宗を信仰する父との対立が深まってきました。その後、大正10年に布教活動のために上京するものの、妹・トシの重病の知らせを聞き、帰郷せざるをえなくなりました。看病をしながら花巻農学校の教師も務め、作品作りも進めていました。しかし、看病の甲斐なく、トシは亡くなってしまいます。その時の悲嘆はとて大きなものでした。

大正13年、詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』を刊行し、大正15年には、賢治は花巻農学校を退職しました。それからは農業に従事し始め、農業技術に関する講義、指導などにあたりましたが、その肉体の酷使が病気を招き、病の床に就くことになってしまいました。しかしながら、病床にあっても、数多くの作品を推敲し、改稿の筆を加えました。

昭和8年9月、享年37歳でなくなりました。

【賢治の童話】

一般に、賢治の童話はイーハトヴ童話といわれます。その由来は賢治自身が童話集『注文の多い料理店』をイーハトヴ童話と名づけたことから始まります。また、その童話集の広告文では「イーハトヴは一つの地名である。……これは著者の心象中に、このような情景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である」と書いています。ここには、郷土に対する愛と、新たな魅力の提示をしようと試みた賢治の理想を表していると見られています。

一方、賢治は自身の童話を「心象スケッチ」の一部であると定義づけています。その名称は、詩集『春と修羅』を出したとき、詩集と呼ばず「心象スケッチ」と称しました。また、賢治は森佐一の書簡に「或る心理学的な仕事の仕度」という意味を込めて「心象スケッチ」という言葉を使っています。現在、解釈は諸説ありますが、白日夢の世界での幻想性や幻覚性がこの言葉の根底にあるのではないかと指摘されています。没年までこの言葉を用いており、心情の記録に努めようとしたようです。

【銀河鉄道の夜】

宮沢賢治の代表作『銀河鉄道の夜』は、生前に発表されることのなかった作品です。執筆開始は大正13年とみられ、改稿を重ねた最終の第四次稿が昭和6、7年頃と言われています。ただし、それでも未完の作品と言われます。

改稿を重ねた作品であるが故に、推敲時期によって、内容に違いがあることがわかっています。例えば、賢治の死から一年後に出版された『銀河鉄道の夜』には、「ブルカニロ博士」なる人物が登場しますが、現在広く読まれているものには登場しません。また、現在出版されている『銀河鉄道の夜』の中には、初期の本文と最終期の本文が混ざったものもあり、本によっては異なる本文が掲載されていることがあります。

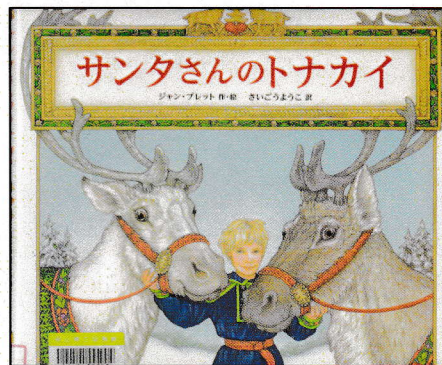
【参考文献】

- 『国文学 解釈と鑑賞』第58巻9号 志文堂 1993.9
- 『国文学 解釈と鑑賞』第71巻9号 志文堂 2006.9
- 『銀河鉄道の夜 宮沢賢治 悲しみを乗り越えよ』ロジャー・パークス NHK出版 2012.5
- 『評伝 宮沢賢治』境忠一 桜楓社 1975.4
- 『宮沢賢治の世界』吉本隆明 筑摩書房 2012.8
- 『賢治童話の展開—生前発表作品—』続橋達雄 大日本図書 1987.4

新着図書紹介

『サンタさんのトナカイ』 ジャン・ブレット/作・絵 さいごうようこ/訳 徳間書店 2013.10

エルフ族の女の子、ティーカは、はじめてサンタにトナカイの世話を任せられ、わくわくしています。ティーカは、トナカイがクリスマスイブに空を飛べるように、しっかりしつけなくてはと思い、力が入って、命令したり、怒鳴ったりしてしまい、トナカイとの仲がうまくいきません。自分の態度を反省したティーカは接し方を変えます。さて、無事にトナカイたちはクリスマスイブに飛ぶことができるでしょうか。クリスマスプレゼントを用意しているエルフたちの姿が、美しい絵で描かれており、クリスマスへの期待をかき立てます。これからの季節におすすめの一冊です。



『にっぽん発見! マップ』 小学館 2013.10

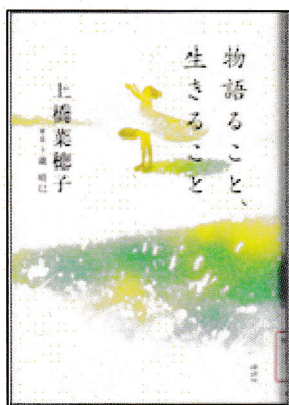
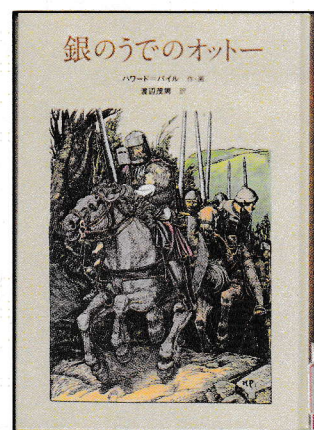
『にっぽん発見! マップ』と題名がついているように、今までの地図とはちょっと違った地図です。たとえば、日本にある世界遺産、特別天然記念物になっている動物、全国を走る新幹線が紹介されています。また、給食やお雑煮も紹介されており、使われている食材や味付けの違いがよく分かります。驚きなのは、全国にあるマンガ美術館や忍者までもが紹介されていることです。この本をちょっとしたガイドマップ代わりに持って、旅行に行きたくなるかもしれません。

また、見開きには、県がバラバラになった日本地図が載っており、県の形を見て県名を当てるクイズが掲載されています。そして、各都道府県の基本データや地図も収録されており、社会科などの調べ学習にも役立ちます。

子どもが興味をそそられる工夫がたくさん盛り込まれた一冊になっています。

『銀のうでのオットー』 ハワード・パイル/作 渡辺茂男/訳 童話館出版 2013.7

本書は、1967年に初版刊行されたものの復刊です。この物語の舞台は13世紀のドイツで、諸侯同士の対立や領地争いが起こっていました。食料などを略奪して暮らしていた男爵コンラッドを父にもつオットーは、生後間もなく静かな白十字の僧院で育てられました。しかし、12歳の時に父親によって家に連れ戻され、父の旧敵ヘンリー男爵に連れ去られてしまいます。人質となり、幽閉されたオットーは無残にも片腕を切り落とされてしまいます。そんな彼をひと目見ようと現れたのがヘンリーの娘です。この娘とある約束を交わすことによって部屋から脱出することができます。果たしてこの後、彼を待ち受けていた運命とはどんなものだったのでしょうか。そして娘と交わした約束とは一体……。作者による緻密な挿絵により、思わず物語の世界に引き込まれてしまいます。『アーサー王物語』や『ロビンフッドのゆかいな冒険』とはまた違った世界を楽しんでください。



『物語ること、生きること』 上橋菜穂子/著 瀧晴巳/構成・文 講談社 2013.10

「作家になるにはどうしたらいいですか。」「どうしたら物語が書けるようになりますか。」とよく尋ねられるという著者。この本では、それらの質問に対する答えとして、彼女のたどってきた道程が語られています。幼い頃に祖母から昔話をよく話してもらっていたこと、そして、一時は作家を諦めて文化人類学の研究者になるために、オーストラリアでフィールドワークを行っていたことなど、作家を目指す人とは思えない意外なエピソードも書かれています。「物語はわたしそのもの」と著者が言っているように、ベストセラー『獣の奏者』、『守り人』シリーズなどは、彼女が経験した全てのことがもとになって書き上げられています。この本を読むと、彼女がなぜ、壮大な話が書けるのかの理由が分かります。また、巻末には、著者自身が子どものころから読んできた文学から漫画までが紹介されており、興味を引かれることでしょう。